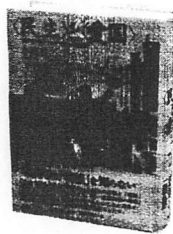


# 「論壇」から考える

日本の戦後思想を検証した筆者が、「論壇」という問題から、現代において「言葉を発する」ということの意味を考える。

小熊英二 慶応大学総合政策学部助教



おぐま えいじ 1962年生まれ。87年、東大農学部卒。出版社の編集者を経て、98年、東大教養学部総合文化研究科国際社会科学専攻大学院博士課程修了。2000年から現職。著書に「単一民族神話の起源」【日本人】の境界】「インド日記」など。

このたび拙著「民主」と「愛国」が受賞した大佛次郎論壇賞は、論壇の活性化のために創設されたものだとこのことである。

せっかくの寄稿の機会なので、ここでは拙著の要約などをくりかえすことはしない。代わって、拙著を書く過程で戦後の知識人群像や社会変動を研究した経験から、「論壇」という問題についての若干の考察を記し、あわせて現在の筆者が考えていることの断片を述べたい。

不思議な重みと力を感じさせる「言葉」が少なくない。そのエッセンスを、数多い引用というかたちで凝縮したのが拙著「民主」と「愛国」であった。この本が評価をいただいたのも、引用した「言葉」たちの力のおかげだと思っている。

しかしそれでは、「昔の論壇」は本当に現在より「よかった」のだろうか。この点について、筆者はいささか懐疑的である。当然ながら筆者は、研究の過程で、拙著に引用したもの以外にも、当時の言論を数多く通読した。また以前の研究においても、明治・大正・昭和の主要雑誌や、新聞社説を通読したことがしばしばある。

その経験からいうと、かつての時代の雑誌論文や新聞社説は、必ずしも平均的なレベルが高いとはいえない。敗戦直後の論壇にしても、後世に語り継がれるような論文がある一方で、あまり優れた内容と思えない論文も多い。

それにもかかわらず、「昔の論壇はよかった」と語られるのは、単純なノスタルジー以外にも、いくつかの要因があると思われる。

第一には、時間による淘汰の問題である。当時の凡作論文は時代を超えることができず、すぐに消えてしまう。図書館などで当時の雑誌のバックナンバーを直接読まないかぎり、こうした凡作論文に接触することはできない。現在のわれわれがアンソロジーなどで目にする機会のある過去の論文は、選りすぐりの名論文ばかりである。そうなれば、平均レベル

現代の論壇は、不活発だともいわれる。「昔の論壇誌や新聞には、優れた知識人の書いた重みのある論文や社説が載っていた」といった言い方も多い。

筆者自身も、現在の論壇における「言葉」の空虚さに、あきたらないものを感じていた。またそれが、敗戦直後の思想を検証してみた動機の一つでもあった。敗戦直後の言論には、

高く見えるのは当然である。

第二には、文体の相違である。時代がさかのぼるほど文体が文語調なので、現在のわれわれから見れば、「格調」が高く見える。また当時としては平凡な文体であるものが、現代のわれわれが慣れ親しんでいる文体とは異なるために、微妙な違和感をつくりだし、それが独特の「味わい」をかもしだすこともある。ただしこの場合も、文体の「格調」はともかく、内容はきわめて平凡という論文も多い。

第三には、おそらくこれが最大の要因だと思うが、論壇雑誌およびそれに寄稿する知識人のポジションが、現在とは異なっていたことである。このことは、若干の説明を要する。「論壇」という場合に、しばしばその代表的な場とされるのは、「世界」「中央公論」「文藝春秋」などの総合雑誌である。これら総合雑誌、およびそこに執筆する知識人の権威が、一九六〇年代の高度経済成長期からしだいに低下し、六〇年代末の学生反乱でその低下が決定的になったというストーリー（ヒストリー）は、しばしば語られるところである。

つまりは、高度成長による社会の変化が、「論壇」および「知識人」というものの社会的位置を変えてしまったということになる。それでは、高度成長以前の「論壇」や「知識人」の位置というものは、どのようなものであったろうか。この問題は、「民主」と「愛国」でも部分的に考察対象にしたものだが、本稿ではもう少し角度を変えて言及したい。